

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成29年1月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所 属 部 局 総合生存学館(思修館)

職 名 学館長・特定教授

氏 名 川 井 秀 一

助成の種類	平成 28 年度 ・ 国際会議開催助成			
事業内容	京都大学総合生存学館第5回国際シンポジウム2016 Disasters and Human Survivability: Enhancing Resilience to Risks Threatening the Future of Humanity			
開催期間	平成 28 年 11 月 21 日 ～ 平成 28 年 11 月 22 日			
開催場所	京都大学芝蘭会館稲盛ホール			
参加者	総数 102名	内 訳 外国人(招聘者):4名(イギリス2名、オーストラリア1名、アフリカ(日本勤務)1名)、外国人(招聘者以外):23名(学内者16名、学外者7名)、日本人(招聘者含む):75名		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	事業に要した経費総額	2,052,517 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	機関経理補助金(平成28年度思修館プログラム補助金)		
	経費の内訳と助成金の使途について			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	旅費交通費	685,770	555,030	
	会場・会議費	413,523	354,610	
	印刷製本費	241,720	90,360	
謝金	267,180			
懇親会	98,400			
その他(会場設営代、立看板等)	345,924			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)			

成 果 の 概 要

京都大学大学院総合生存学館
学館長 川井 秀一

平成28年11月21日(月)および22日(火)、芝蘭会館稲盛ホールにおいて、京都大学大学院総合生存学館の主催により第5回国際シンポジウム「Disasters and Human Survivability: Enhancing Resilience to Risks Threatening the Future of Humanity」を開催しました。当日は、京都大学学生および教職員だけでなく、外国の大学を含む他大学学生および教職員など約100名が出席し、災害と総合生存学について積極的な質疑応答が行われるなど、盛況のうちに終了しました。

シンポジウムは、11月21日に総合生存学館の河合江理子教授を司会として、北野正雄理事(教育・情報・評価担当)、続いて川井秀一学館長による開会挨拶で始まり、以下のプログラムのとおり行われ、いずれも活発な討論が展開されました。

【11月21日】

1. 基調講演：「A Classification of the Risks Threatening the Future of Humanity」
Shahar Avin 研究員および Julius F. W. Weitzdörfer 研究員
(ケンブリッジ大学 Centre for the Study of Existential Risk)
2. セッション1：「将来の大災害のリスク」
講演1：総合生存学館 磯部洋明准教授
講演2：防災研究所 James J. Mori 教授
(モデレーター：総合生存学館 山敷庸亮教授)

【11月22日】

1. ポスターセッションの趣旨説明：総合生存学館 Marc-Henri Deroche 准教授および総合生存学館学生(ポスター発表者)
2. セッション2：「過去の大災害の歴史」
講演1：文学研究科 小山 哲教授
講演2：総合生存学館 光山正雄教授
(モデレーター：総合生存学館 泉 拓良教授)
3. セッション3：「経済学と経営学の観点から見る大災害に対するレジリエンスの強化方法」
講演1：マッコーリ大学 Centre for Financial Risk Stefan Trück 教授
講演2：一橋大学大学院国際企業戦略研究科 大橋和彦教授
(モデレーター：総合生存学館 金村 宗准教授)
4. パネルディスカッション：全講演者(モデレーター：山敷庸亮教授)

なお、11月22日の休憩時間中には、総合生存学館学生によるポスターセッションが行われ、最後は、総合生存学館のヤルナゾフ・ディミター教授(学館長代理)による閉会の挨拶がありました。

本シンポジウムにおいては、地震・津波・洪水など、いわゆる「通常の災害」だけではなく、「宇宙災害」「パンデミック」そして、これらの低頻度・高インパクト災害に対する財政的メカニズムの構築、そして歴史的視点からの議論を高めることができ、非常に有意義な会議となりました。また、JAXAの吉川氏による実際のスペースガードの活動の紹介があり、参加者からの重要なインプットもあったと言えます。また、通常一同に会することがない、宇宙分野の研究者、地震や洪水など災害分野の専門家、ファイナンスの専門家、歴史専門家、そして病理学の専門家等が、「大規模災害とそのリスク回避」について議論を深め、さらに現在までの枠組みで十分に対応できていない内容について明らかにし、客観的な比較指標について提案があったことは、新しい学問分野提案のための重要な提言であったと考えられます。本シンポジウムでは、災害を時間軸、空間軸で評価し、さらに災害に関わる領域を地球だけではなく、太陽系、そして宇宙空間に拡張しており、かつ影響範囲においては、具体的な地球と人類の歴史軸に明らかにすることができました。これにより、我々大学院総合生存学館が目指す「総合生存学」の確立と、未来の地球への貢献を志す「地球未来学」の構築に大いに資することができました。

また、教育的見地に視点を移すと、本学館の学生たちにとっては、国内外の一流の研究者から直接最先端の研究内容について話を聞き、討論に参加できたことは貴重な経験となり、また大きな自信になりました。さらに、ポスターセッションでは、それぞれの研究内容を本学館の教員以外に披露する機会となり、学生たちはポスターの内容に工夫を加え、研究者からの質問にも堂々と答える姿が見られました。このことは、学生たちにおける今後の国際学会の発表へのステップと位置づけることができ、また、研究の方向性について考える大変重要な機会となりました。

今後は、シンポジウムの成功を将来に繋げられるように、研究に精力的に取り組むとともに、シンポジウムの成果物として *Journal of Disaster Research* という学術雑誌への投稿、およびより詳しい成果報告書の公表を予定しています。

最後に、シンポジウムの開催にあたり、京都大学教育研究振興財団からの助成に深く感謝申し上げます。同財団の助成により、海外から講演者を招へいすることができ、シンポジウムの内容に幅をもたせることができました。また、フライヤーを印刷および配布することにより広く周知することができ、多くの参加者を得ることができました。以上のように、本シンポジウムを盛況のうちに終了することができ、今後の総合生存学館の研究活動やプレゼンスの向上に多いに貢献することができました。



講演者および学館教員等との記念撮影



講演者全員によるパネルディスカッションの様子